

学位論文の要約

論文題目 日本人学習者による韓国語の音声運用に関する研究
—学習者の動機づけと韓国語の音声運用上に見られる特徴—

申請者 朴瑞庚

本論文では主に大学における第二外国語としての韓国語教育を視野に入れ、大学に入ってから韓国語を学び始める日本人学習者が韓国語の音声習得する過程において具体的などのような問題点を抱えているのかを言語そのものと学習者の個人差要因を考慮に入れ、時間軸に沿って検討した。まず、学習者の個人差要因の側面から、学習を始めて間もない日本人学習者がどのように動機づけられている状態で韓国語の学習を行っているのかについて検討した。次に、実際の韓国語の音声運用という側面から、1年間にわたる韓国語学習が終了する時期と2年間の韓国語学習が終了する時期の日本人学習者を対象とし、日本人学習者が韓国語の音声を運用する際においてどのような特徴が見られるのかを多角的に検討した。

本論文は全7章で構成されている。この中で具体的な分析を行った第2章から第6章までの内容をまとめて以下に述べる。

第2章では、韓国語を学び始めて2ヶ月が経った日本人学習者を対象とし、自己決定理論を基にして作成された質問項目を使用してアンケート調査を行い、韓国語の学習全般と韓国語の発音学習における学習者の動機づけを調査した。調査の結果、以下のような特徴が見られた。まず、全体的に、学習者は外的圧力によって動機づけられている状態で韓国語を学習する傾向が強かった。ただし、学習者が韓国語の学習全般に対して外的要素に強く動機づけられていても、具体的な学習活動である発音学習に対しては外的要素に動機づけられている程度が学習全般と比べて弱く、学習者は韓国語を学ぶ上で発音学習の必要性を認識しているのではないかと思われた。次に、学習到達度と学習者の動機づけの関係を調べた結果、学習到達度の低い学習者ほど外的にも内的にも動機づけられておらず、学習意欲自体がない者が多く、学習到達度の高い学習者ほど動機づけがより内在化されている傾向が見られた。

第3章では、韓国語を学び始めて1年が経過した日本人学習者を対象とし、1年間にわたる韓国語学習が終了する時点において彼らが評価する韓国語の各音声に対する難易度はどの程度のものなのか、また、聴取と発音の両側面から、実際に韓国語の音声をどのように運用しているのかを分析し、考察した。分析の結果、以下のような特徴が見られた。まず、母音の対立におけるアンケート調査の結果、学習者は母音の聴取と発音においてさほど負

担を感じていない様子であった。聴取実験の結果では、/ʌ, o/の場合、両者を互いに混同して同定する傾向があったのに対し、/u, ʊ/は/ʊ/を/u/に誤聴する傾向が見られた。発音実験の結果では、/ʌ, o/の場合、両者を互いに混同して発音する傾向があったのに対し、/u, ʊ/は両方を/ʊ/に発音する傾向が見られた。学習者が産出した各母音に対してフォルマントを測定した結果、母音空間内において/ʌ, o/は相対的な距離が近づいて実現されており、/u, ʊ/の場合は/u/における舌の前後位置が前寄りになっている学習者が多く見られた。次に、初声子音の対立においては以下のような結果が見られた。初声子音の3項対立におけるアンケート調査の結果、発音の難易度が検討した音声項目の中で最も高かった。特に、学習者は3項対立をなす初声子音の中で濃音の発音に対して負担を感じていた。聴取実験の結果では、平音系列の同定率が濃音系列と激音系列に比べて高かった。発音実験の結果では、平音系列>激音系列>濃音系列の順に了解度が高かった。学習者音声に対してVOTとF0を測定し、韓国語母語話者のものと比較した。その結果、韓国語母語話者の音声においては平音・濃音・激音がVOTとF0の両方を基準にして3つの範疇に分かれて分布していたが、学習者の音声においては平音・濃音・激音が各々の領域を共有しながら分布している様子を見せていた。初声子音の2項対立に対しては初声子音の3項対立とは異なる結果が見られた。アンケート調査の結果、聴取と発音とともに難易度が低い方であり、学習者は他の音声項目と比べてさほど負担を感じていない様子であった。しかし、実際の聴取能力と発音能力を測定した結果、平音を濃音に誤聴し、濃音を平音のように発音する傾向が強かった。音響分析の結果では、特に氣息区間の長さにおいて韓国語母語話者と学習者の結果の間に顕著な差が見られた。最後に、終声子音の対立については以下のような特徴が見られた。調音位置と関係する終声閉鎖音と終声鼻音に対してアンケート調査を行った結果、聴取の難易度が検討した音声項目の中で最も高かった。特に、学習者は歯茎音/n/と軟口蓋音/ŋ/を聞き分けるのが最も困難であると評価していた。聴取実験の結果、調音位置が歯茎と軟口蓋の際に比べて両唇の際において安定的に同定を行っていた。誤り傾向としては、軟口蓋音/ŋ/を歯茎音/n/に誤聴する傾向が強く、アンケート調査通りの結果を見せていた。発音実験の結果では、調音位置が歯茎と軟口蓋の際に比べて両唇の際において発音が安定していた。音節構造と関係する終声流音に関してアンケート調査を実施した結果では、聴取と発音とともに、検討した音声項目の中で学習者の負担が最も少なかった。また、実際の聴取能力と発音能力を測定した結果においても聴取と発音を安定的に行っていた。これまでの聴取実験と発音実験の結果を基にしては多角的に分析を行い、考察を深めた。熟達度による群分けを実施し、各群が韓国語の音声をもどのように運用しているのかを調べた。その結果、聴取と発音とともに、熟達度が高いほど各音声項目における同定率と了解度が高い傾向を見せていた。また、熟達度が低い学習者ほど母語の干渉を受けやすく、熟達度が高くなるにつれて母語への依存度が減少する傾向が見られた。学習者の音声に対しては、音響分析で検討した複数の音響的特徴の中でそれぞれの特徴が韓国語母語話者の評

価にどの程度の影響を与えているのかを調べた。その結果、母音/ʌ, o/はF1が、また、母音/u, ʊ/はF2が韓国語母語話者の評価に有意な影響力を持つことが確認された。初声子音の3項対立に関しては、平音はF0が、濃音はVOTが、激音はVOTとF0の両方が韓国語母語話者の評価に有意な影響力を持っていた。初声子音の2項対立に関しては、氣息区間の長さが韓国語母語話者の評価に有意な影響力を持つことが確認された。知覚と産出のリンクを仮定しては、聴取能力と発音能力の相関性を検討した。その結果、全体的に聴取能力が高い学習者が発音能力も高い結果を示した。

第4章では、韓国語を学び始めて1年が経過した日本人学習者を対象とし、彼らが韓国語の音韻規則に対して知識を持っているのか、また、音韻規則を発音へ適用する際にどのような特徴が見られるのかについて検討した。有声音化と中和の規則に関しては、アンケート調査の結果において規則に対する知識を持っていると答えた学習者の比率が両規則ともに高かったが、中和については規則に対する知識が部分的に間違っている学習者が多く見られた。有声音化と中和の規則に対して行った発音実験の結果では、両規則ともに60%前後の比率で規則を発音へ適用していた。発音の誤り傾向を詳しく調べた結果、有声音化は母音が先行する音声環境と鼻音が先行する音声環境とともに、規則の発音への未適用が問題になっていた。中和の規則に関する誤り傾向には、中和された終声子音の調音位置が間違っている例が目立ったが、それとともに、終声子音を脱落させたり、後続母音を挿入したりする例も観察された。濃音化と激音化に関して調べた結果、濃音化は規則に対して正しい知識を持っている学習者の比率が低かったが、韓国語母語話者が学習者の発音を聞いて濃音化の規則を発音に適用していると判定する比率は高かった。それに対して激音化に関しては、規則に対して正しい知識を持っている学習者の比率が濃音化程度であったが、規則の発音への適用率は濃音化と比べて40%程度低い結果を示した。激音化に関しては、「/h/が脱落する」との間違った知識を持っている学習者が多く、このような間違った知識が発音へ反映される傾向が強かった。それとともに、韓国語母語話者によって激音化の規則を適用すべき音声が発音に聞こえると判定された例が多く見られたのが特徴的であった。鼻音化と流音化に関しては、規則に対して正しい知識を持っている学習者の比率も低く、発音への適用率も低かった。発音実験の結果、両規則ともに韓国語母語話者によって規則を発音に適用せずに音節ごとに発音していると判定された比率がかなり高く、規則の発音への未適用が問題点として確認された。

第5章では、第3章で実施した発音実験を拡張させ、実際のコミュニケーションの場面を想定し、発話スタイルの変更によって日本人学習者の発音した韓国語の音声にどのような変化が現れるのかを検討し、日本人学習者による韓国語の音声運用について考察を深めた。第3章において日本人学習者の発音が最も困難であった初声位置の平音・濃音・激音の3項対立を対象とし、普段のコミュニケーションで用いる発話スタイル(CNVの発話スタイル)からコミュニケーションが困難な状況の中で聞き手の理解を助けるために話し手が

音声をより明瞭になるよう調整を行う発話スタイル（CLRの発話スタイル）へ変更することによって日本人学習者が発音した3項対立の発音の了解度がどのように変化するかを調べた。その結果、CNVの発話スタイルと比べてCLRの発話スタイルにおいて濃音と激音の了解度は上昇し、平音は下降する傾向が見られた。各発話スタイルにおける学習者の音声に対して音響分析を行い、韓国語母語話者の結果と比較して考察した。その結果、平音の場合、CNVの発話スタイルと比べてCLRの発話スタイルにおいて韓国語母語話者はVOTの増加とF0の減少が見られたのに対し、学習者はVOTの減少とF0の増加が見られ、韓国語母語話者とは逆の方向にVOTとF0が拡張されていることが確認された。これらの結果を見ると、学習者は平音に対する発音基準が不安定であるため、意識的に発音することによって平音の特徴でない音声的特徴が際立って実現され、CLRの発話スタイルにおける学習者の音声の多くが韓国語母語話者には平音として同定されなかった可能性があると考えられた。濃音の場合は、CNVの発話スタイルにおいて学習者が産出したVOTが韓国語母語話者と比べて有意に長かったが、CLRの発話スタイルにおいてはVOTの差が縮まっていた。これは、CLRの発話スタイルにおいて学習者が韓国語母語話者と同じ方向にVOTを変化させていることを意味し、たとえ1年間の韓国語学習が終了する時点において濃音の了解度が低くても、時間をかけて練習すると安定的に産出できる可能性が十分にあると考えられた。激音に関しては、CNVの発話スタイルと比べてCLRの発話スタイルにおいて、拡張の程度に差は見られたものの、学習者が産出した激音のVOTとF0が韓国語母語話者と同様の方向へ拡張されており、学習者は激音に対して正しい発音基準を持っていると考えられた。

第6章では、韓国語を学び始めて2年が経過した日本人学習者を対象とし、比較的上級段階の言語活動であるスピーチに対して学習者のデータを収集し、パラ言語と関連づけて考察した。学習者のスピーチ音声を分析した結果では以下のような特徴が見られた。まず、韓国語母語話者に評価してもらった結果では、学習者のスピーチに対する全体的な印象評価の結果とパラ言語の各評価項目における評価結果の間に正の相関関係が認められた。この結果により、韓国語母語話者は学習者のスピーチ音声を評価する際に、パラ言語を評価基準としていたと考えられた。評価項目の中では「流暢さ」の評価結果が全体的な印象評価の結果と最も高い正の相関関係が認められており、学習者のスピーチを評価する際に「流暢さ」が重要な評価指標になっていることが示唆された。次に、「流暢さ」に焦点を当ててスピーチ音声における音声的特徴が「流暢さ」の評価結果とどのような関係にあるのかを調べた。その結果、発話の速度が速いほど、スピーチの中で反復を行う頻度が低いほど、流暢であると評価され、沈黙が長く、フィラーを多く使用するほど、非流暢であると評価される傾向が見られた。今後は、本論文の研究で明らかになった点や問題として考えられた点を踏まえ、効果的な音声学習の方法を具体化していく必要があると考えられる。